



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4



曾
門
歸
卷

嚙とは。也活うるく鳥れ友と求る者
ありとも。野之口隆ふ。國都東平西回直善。此
又アリ。其翁を近き比く。こは。都ふ。や。あ。と
学ど。さう人や。仰け面を。争う。皇國學
漸。ゆき。と。と。か。か。か。ち。か。て。か。か。と。み。お
因す。晴。り。強。の。よ。と。と。め。う。せ。ま。と。

ひやまくせ中かむけふともぬけりもお
うれのきととられひく筆寫の草稿かと
様の文書ハ西草の毛ニ月毛と毛と筆之口
もうぐてゆえ毛はよみと毛筆の道也
そがよ 神代の毛と毛毛と毛はゆす
樂に筆説といふぬととすすと純ハうれ三文

月毎ほそのかす、うひくらり出あすてり
くら支直くまとあつてすらすらとお囃はる
きつけまく、紙有とせむるを語ゆてけ
文有心とす、うひくらりおとしき有其れ
却て毛うて遠きおとすもあつまつせん
そくへた皇國はうひのせふふうと

家業の爲めに、此處に於ける達也伐木

行ひたるを以て、かくす辞下

天保十三年正月

正二位具集

喂く筆語

目安

教説

槐位之事

聞佛法僧鳥說

古今集三鳥說

内宮相殿考

水車

大倭詞

爲朝死生論

野之口隆正

西田直養

岡部東平

隆正

直養

東平

隆正

直養

阿部多知婆奈

東平

筑紫君磐井論

直養

伊登奈志考

妙玄寺義門

食穴禁

東平

四季十二月名義考

隆正

早吸名門考

直養

多那具母考

隆正

總計十六條

釋名筆語卷一

野之口隆正

たのまほのよひ。音ハ萬國同ドくて。言語、萬國同ドリバ。道、
萬國同ドリバ。教ハ萬國同ドリバ。天竺トおもむく佛教を。
幽冥と旨とて顯露とこととぞだう。唐土小てね、主に儒教を。
顯露と局アテ幽冥とかくバ。六乃日本は教ハ幽顯分界と旨と
て。天地の始と、幽冥少とぞだ。今日乃事業を幽冥とぞおきて朝家
服事す。とくとくふるのうちと考ふる小古典より愛せ字とナレと
さり。鶯鶯とぞりすあり愛し鳥がればひゆかう。されど

とくとくとくばよ愛字は義と惜字は義とくわあうとくわべ
へやとくとくとくは皆迎へ合むるをもとて愛とちりひ惜とお
りふきろく迎へらするへわざとくわくふくはひふなう善人
とくわいとねりふくわくよ。善くふくよくんとくく。惡人も
惜ともりひて直るてくわくんらむとくふ。うれ佛教儒教とかう
用ゐたずひく。中昔よう民とくわびむたまく。萬民と愛とれも
ほく惜とれむをくわくよおんじやく。されば佛者よほき。儒者よ
まれ。本學者小まれ人と教るほどの人ハ愛。惜ふのくわくとくづさ
ば。人と善道へくわくべきむ。とおのくふの故事ふとうて人と
教へ導く。ものと世と和學者國學者かくいとらふれ名稱よ

ちくばくふてハいのいへくわく。本教本學とくわくとくう古
事記序よ太素杳冥因本教而識孕土產島之時元始綿邈賴
先聖而察生神立人之世とく。本教ハ儒佛の教とくとく
世の教といふ。さればものとくの古事と本教といふ。とくの
とくとくと本學とくわくとく

槐位ハ凡下とくとくとくとく論 西田直養

つりく史と考る。皇國ハ西土とくわくかく。鼻賤よう起アリ。
槐位ヨツクナリ。人ハもとて終と全くせば。おとと地下よう。昇進
きくとく人とかくふく。仁安よ清盛公。登庸。治承よ
重盛公。壽永よ宗盛公。建保よ實朝公。永徳よ義滿公。應永よ

義持公・永享・義教公・長祿・義政公・長亨・小義尚公・天正二
信長公・秀吉公・信雄公・秀次公・慶長・秀頼公・とすべて十四員
なり。此中・宗盛公・カガサリノソウカラ傘張僧綱が子なるは・盛衰記・見え
秀次公・尾張海部郡の人彌助が子なると・豐臣譜・見え秀
頼公・名古屋山三郎が子なると・鹽尻・詳から。是等の入
人ら皆白刃にて終と全くしてまうべ。其余の方々・桓武天
皇の後胤・ミナヅチ。貴族乃福害小あい。詮・詳から。此中・秀吉公・尾張愛智郡・中
村・郷の筑阿弥が子小して終と全くしてまうべ。いふも不審なる
と・貞徳翁の載恩記・ミナヅチ。貴族乃福害小あい。時秀吉公・いつも御參内の時・御裝

束とやへらる御中やく施薬院にて曰・我尾州の民間より出
はまば草かるとぞもあらざれど・筆とふといえまへば・きやく
歌連歌は道よ・ミナヅチ。貴族乃福害小あい。所下女たゞしづく玉體
但り・母若き時内裏けづれ所下女たゞしづく玉體
小ちづき奉つて・ミナヅチ。貴族乃福害小あい。其夜は夢よひ・千け御技箱・伊勢より
播磨とて・ミナヅチ。貴族乃福害小あい。天と飛行・又千早振神のとてぐ
手小とて・ミナヅチ。貴族乃福害小あい。御夢想を感じて・我と懷胎し・ねとづくやう
アーティ・翠竹軒の天正記・天正十七年四月八條殿大宮御歳八才
式部卿親王感冒・發熱・中民部卿法印命予病證・次第分別無用捨可申ト。

予曰見傷寒、四逆之證也。中醫林集要ノ四卷ヲ披テ、茯苓四逆湯ヲ可與ト申一人モ無用ト被存候者、即可被申候ト。口ヲ堅メテ調合ス。民部法印、自ラ煎ソ與之一服ニ、御脈微顯。二服ニノ脈全調神氣而四肢溫。翌日平安。其後御養生藥進上メ。十余日ニノ本復ス。于時關白大相國秀吉公、御感之餘、御馬ヲ被下云々。此一條まで秀吉公ハ、皇胤と申奉候。正親町天皇誠仁親王は御嫡ひき。是桂宮家ハ御元祖ひき。前より戴恩記内玉體とりふる。もとふくら正親町天皇の御事ひき。秀吉公ハ陽光院殿とハ御兄弟ひき。志のぞむれど則八條殿ハ御甥ひのわと申奉候。

歡喜うれしきよなえび。道三は御馬おとこと下されさげり。さて八條殿やつじょうでんと六宮と申奉まこと。天正の頃ころ、尊崇そんそうをもとも。太田和泉守の天正記卷五、聚樂御幸の後、地子錢と禁庭きんていを奉りた所ところ。木ハ百石ひゃくせきなり。内三百石さんびゃくせき、院御所いんごしょへと進上しんじょう。残のこり、關白かんぱくアヤシム六宮殿ろくくうでんと進上しんじょう。全く御甥ひのわのつたより内事うちごとをもとも。次第じだいをもとも考かる。秀吉公の心と盡つくして經營えいぎ。桂里の殿舍でんしゃと名護屋めいごやへ下おすたずふと。日用の調度とうどともとも。桂ノ御殿ごでんふき、とあるに内調度うちとうどと。然るに、後陽成天皇の御兄弟ひきふき。當時そのとき、心こころ乃のす。すくなくとも、はなまへは事ことなく。我友伊東松いとうまつが説いわ。秀吉公の御母おとこのおとこと尊そんびひ。其そのもと嚴然げんぜんたま。父ちちはととなくく物もの見みええ。此公の威勢いせきふくても。其父ちちは爲ため。

かくすば納言以上の贈官とば。孫がそれねばまことのほめのちむすゆゑ
ひづぐく。又朝鮮よつうはされし書翰よ。慈母夢日輪入懷中而吾
以降云々とかまくまく。御祓箱の夢の事ひづぐく。御祓も則
天照大御神なれど。やがて日神なりとひづくし、確論こさて
かく秀吉公の奄然として伏見の城よ薨去したゞひて疑ふべ
きこと小あらび。そもそもあくまくよう。開闢以來唯一王といひての万
國よまとくと。誰もくつひともやど。凡下は人の槐位よけだ
まくば。終を全くせばといふてと。わたくし入内ひそむる。まぢれ
まじかく考證を引て。また萬國よまとく。ひとくわら美事と
世よ顯よむことを。因より政事といひものも。西土よとを。帝王自ら

執れふ。まよのむと。皇國ヨリハまづば政教訓ハ祭事といふ說
いふと。言はりやうと奉仕事ひづくと。鈴屋翁のひづれど。源
氏をひづく。せをひづく。とひづく。用語小して體語よひづく。
されど臣下よせれ事とひづく。天皇ハその事とひづく。め
たすふ。古事記上卷。天照大御神の詔よ思金神者取持前事
爲政と。又同書の中卷よ。神武天皇と五瀬命と議アキラミテ
坐何地者平聞者天下之政と。又景行紀よ。倭建命の御事
いす所よ。御子者所遣之政遂とひづく。とて臣下よ政しめをと
聞看御事ひづくと。世もくどらゆくまんく。院中ヨリ政事を
どうもくどらゆくたまふ。やうよ。がくゆくまんく。今を東代遠御門

少々大八鳴國の事とちうづきうちうぢらたすひ天皇をうへるま
ましりくちくくやがて大御神とうがまへらきさめにまひぬまう。上
世に風よたちかまう大御世なら。萬葉集は天皇の清事とやす
るとして遠神吾大王とくわくわくとくわく現人神とは
まんを尊へとむだふくくもくもく年一たわどちうづく

聞佛法僧鳥說

岡部東平

ちくくもよもくで名くたる物もあゆま。中少も鶴れいを
都く留くとふやくよゆるもく。その名少もくつひよ知く与く
よ聞かれてはるべからうが。千代の壽詞の初ホキコトとくわくた
ゆく。かくにと量へいもかうす傷もつづきと。いの物さ

ため乃序よその一ニツといても。加く利くとむくハ雁。加く良こと取
くハ鳥。紀く无くとなくも雉。須く受くとれく。雀などふく。鳥の
ちくび虫けたりひよす。數ひともふくべ。されどその知く与く
加く利く。加く良く。須く受く。人によく。云とハ遙くふく
さく小通ひす。おほえびく。鶯も古へハ字一久一比。とくわくとみて
ふ呼る。うそ後世少く。保く於祁紀。与とも少く。かく。法華經との
ひちう。佛書は名よ思ひ。せ。加く祁。多く加く。とくわく。本尊
ひちう云らもやうよちく。鳥よとむん定むめ。とくわく云。たうじ
て後よき。けむ。いうふもとありひくせらまも。まく心ひく。おこへ。

皆々 入れあのが、心に趣く方よりゆくと。とすかう
もが、あらう。とまこと其鳥等よ心ゆうて、いりで、ゆびてま。
ともひて、轉合さばそらうね、行とも思ひゆうて、な、おのまく
孕きる。天地のなまくまは音小もじくと。彼天稚日子と喻
しらう。名鳴雉伊邪過伊邪過と誘ひだらし。八咫鳥は類ひ
ともりの小思ひ云へきて、かくて其鶴鷺郭公その外もあく
音もて名あひまく。哥小もよ文小も作まといと。風流もると。
此頃此言種は云さわぐす。西山は佛法僧さんと怪れた。高野
大師の詩むるをかくと。さやうなうすううど。の小もや
まくもやうもとまくもやうと。とふう傾かうと。小ほくと。

文政初年やきん。余いまと筑紫の故郷ようりくらう。竈
門山ふすもとて。其山は御笠郡よざくらう。おとひうらう。取
ありの出らう。神社けらうの森をちうをす。うれもと一通う
つて。保くとふやうじよとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
此度は松尾山をうやうむと。麥つさ鳥をう字をせま。
と云。瓦菖小やうむと。黄昏と暁。ふくらう。あます。うげる。
保くとゆうゆうゆうと。よく耳留。も。鬱保於鬱保於。宇保於
宇保於。呼子鳥。鳴保於。鳴保於。とくとく。小もん。どやう
おぼえある。これどもひも思ひ寄る。佛法といふ字は二音を唱る

乃夏四月望

古今集三鳥說

隆正

あくよ、大國主命經營たまひりも、トモはるまは小ノアリよ
シホミ少彦名命經營したまふと、神代紀よりあらざるゆゑり
レハシル。あらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくら
のうん。あらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくら
そのうわうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくら
へて唐土をちよろくちよろくやふるしゆうる。おの國、おの國、おの國
シロハシトクモヒキ本は名とはあらうとくらうとくらうとくら
ウテ、いづ名もひく。おのあらうとくらうとくらうとくら
シムスル百鳥も。とくらうとくらう鳥とくらうとくらうとくら
うとくらうとくらう。おとふとくらうとくらうとくらうとくら
うとくらうとくらう。春みまをよす夏

うけ人をさぶやくもむかうけ。さかの名ふとをありうる。さか
中玉カツホオトシム。も御とさばきる。はうしん。ほくま
佛法僧もども。うめまぶあくらみ中れ。一種をうぐわくもくさく。うふ
ゆはせう。諸説もらへずれど。もとある。おもひ猶らきわる。小鳥乃
総名か。稻とかうとも。頃はわざくもとむち。されハ稻課鳥也。以ふ
名をいふ。うぐくおりふう。朝ありて。といひて。夕がよし。秋
け花と。うぐく。朝がほとつひ。あそひ。軒端くづとる。ほひぢ。秋の
むらさく。あみふ草と。うぐく。もと。おのぶくと。うぐく。れり
合をぐく。

伊勢内宮相殿考

直養

古事記上卷小曰爾日子番能邇^{コニヒコ}藝命將天降^{ギノコトアモリサムトスルタ}之時居天之
八衢^{ニヰテ}而上光高天原下光葦原中國之神於是^{コニアリカヘテラスカ}有故爾天照大
御神高木神之命以詔天宇受賣神汝者雖有手弱女人與伊
牟迦布神面勝神故專汝往將問者吾御子爲天降之道誰如
此而居故問賜之時答曰僕者國神名爰田毘古神也所以出
居聞天神御子天降坐故仕奉御前而參向之時爾天兒屋命
布刀王命天宇受賣命伊斯許理度賣命玉祖命并五伴緒矣
亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡者專爲
我御魂而如拜吾前伊都岐奉次思金神者取持前事爲政此

二柱

神者并祭佐久久斯侶伊須受能宮

傳曰此二柱トカラ大御神の御魂實の御鏡と思金神の御魂實とトモ指て申シテ此ハ君臣尊卑ミツヒ此シテ同ドウ二柱と申シテ古意コトノヒ神名帳小伊勢國度會郡大神宮三坐ス相殿タガミ坐二柱ス儀式帳ス同殿坐神二柱ス坐左方ス稱天手力男神靈御形弓坐右方ス稱万幡豐秋津姫命トヨアキツヒメノミコト也是皇孫之母靈御形劍坐ス此記と相照ドウゾウ思ふよ左ス方ス坐ス天手力男神スとハ思金神ス誤ス傳ス考ス翁の説スてス儀式帳ス左方ス坐ス天手力男神スとハ思金神ス誤ス傳ス傳スのちスとハ又ス少スあるぬやス

六シカク高御產巢日神トモ誤ス傳ス高御產巢日タカミタカミハスヒ、神トモ誤ス傳ス、以ス下ト、爰ス文乃タカミ委ス、初ス天照大御神、高木神トモ之命ス宇受貴神タカミタカミハスノミコト、猿田毘古神タカミタカミハスノミコトはス御前タカミハスノミコト仕奉スル向スル、猿田毘古神タカミタカミハスノミコトの答ヘタマひタマバ、ぞれより二柱トカラ神タケミタケミハスノミコト、共ス議スル、通ス藝ス命タカミタカミハスノミコト五伴緒タカミタカミハスノミコト加スル、天降スル、又其時ス瓊鏡タカミタカミハスノミコト、思金神手力男神タカミタカミハスノミコト、天石門別神タカミタカミハスノミコト副スル、此鏡タカミタカミハスノミコトハ専スル我タカミタカミハスノミコト御魂タカミタカミハスノミコト、吾御前タカミハスノミコト、御前タカミハスノミコトの事ス取持スルて申シテ藝ス命タカミタカミハスノミコト詔スル、其次ス思金神タカミタカミハスノミコトハ御前タカミハスノミコトの事ス取持スルて申シテれスとハ此處ス文三等スつスどもスり、かス

おりて此二柱神者并祭佐久々斯呂伊須受能宮とひ
文句で初々出る故爾天照大御神高木神之命以詔天
宇受賣神云々と不處はか並てアラハ則此二柱神と
ソトカナベ天照大御神と高木神との御事なるこそ、
いしに鏡と思金神といふをニ柱神と以ひか
テ、にと御魂實オホシタ小もせよ此鏡コモロといひあつて、やがて器
物たり、器と神とハ同等コモロいひ、又君と臣とと并て、思
神ハ高木神の御子二柱神と稱ハラスて、神議ハラスて、
以下ハ此二柱神日神と高木神とと云ひて、神議ハラスて、
てのたまひをすとありて、爰ハシマニ二柱神の御功績と

とじめをうねるまむちとくとく高御產巢日神と申ハ、天
神の中小も殊御德のゆ御神と、事とゆく附ち、つゝ
天照大御神と、なじび坐て議ハラスて、記中によると
所出より、する忍穗耳命オシホミの、天浮橋タカツキにて中國ナカツキを
げり、ひそかに天アメ還アメタシ、附モキテ、爾高御產巢日
神、天照大御神之命以云々と出、又苦日神の、三年まで
アド申したまくらしと云ふ是以高御產巢日神、天照大御
神、亦問諸神等とひ、又天若日子、神の八年ハシマとも、かつて
と申そつす附モキテ、故爾天照大御神高御產巢日神、亦問
諸神等とひ、又天若日子、神の矢ササギ射上アゲル一時も、逮坐

天安河之河原、天照大御神、高木神之御所（いもとニイキナカ）といで又建御雷神の、中國（カナヘイ）とむけたすひと申なまひ一時も、爾天照大御神、高木神之命以（ヨリ）とぞ、さうむかく二柱神（ツツクモミコト）をびすて、神議（シメテ）いたすふあど、ひもよき御神（ミコト）はせぐ、天照大御神と相殿（シヤウジヤウ）と鎮坐むとさりと御事（ミコトハシタ）をうち、さて神漏伎命（カミロギノミコト）、神漏弥命（カミロミノミコト）といふとて、縣居翁（ミタケノミコト）ハ皇祖（ミタケノミコト）の男女乃神達（ミタケノミコト）とつと、りとど、又うそひとくの古傳說（コトブシタガタ）、釋紀（スルガタガタ）ひき。龜兆傳（カニタタガタ）といふ、凡述龜誓（カニシタガタ）、皇親神魯岐（カムロギ）天照大神（カムロ）之謐也（ミタケノミコト）、神魯美命（カムロミコト）高御產巢日（カウケンヒマツヒメ）とつと、ゆきりがるとすゞりて、極りぐ。此二柱の大神を、と天神と、よりやうすく、又考えに此記

小伊須受能宮（イヌノヒヤ）より二柱神といつて祭るとして、外宮（トウミヤ）より登由宇氣神（ユウケ）またとひよ、かとより内宮（ネミヤ）ハ二坐、外宮ハ一坐（シタ）かの底筒（シタハシマ）之男命（ミコトノコノコノミコト）、中筒（ミタケハシマ）之男命（ミタケノミコト）、上筒（カミタケハシマ）之男命（カミタケノミコト）の墨江（モロコシ）三坐鎮坐（シタシタシタ）して、後（アフタ）三坐（シタシタシタ）もあされ、一坐（シタ）す。万幡豐秋津姬命（ミタケノミコト）ハ高木神の御女（ミコトノメイ）、殊（スミ）に、万幡豊秋津姫命（ミタケノミコト）ハ高木神の御女（ミコトノメイ）、殊（スミ）に、小邇（キタカ）藝命（ヒカルミコト）の御母（ミコトノメイ）もすすめさせば是と合せ、三坐（シタシタシタ）といつとまくちとて此考（ハシラシ）ひみとをもとあきばがくうれ志すねと、つゝ。恐あれど心づくめとあ事とぞもざむじよ、亦口もとわざりわかれど、筆とると、すれど猶且れふざくらふぞやもれもとふき巴（ハシ）とを披ふる年々人、

まよひたまよ

水車

東平

難波より下りて淀川の水車と云ふ、かくありひつ。ある事
りて、世中此事、ちびても此車かかすひまんあほえどる。今は二年
月日れうつしやくらふさぬはまくふもいそが、うみ古事記傳小もい
ちをくるまく、善事惡事ヨキかくまよ少くらふじくばくとそとも
定めづれよすりてなり。その中でおゆきをもとひくのをくい
そど、造天地の説、づきの國クニからひとど、皇國は古傳ぐくく
くくむすび、實徵ミツシテくるちくとひそゆ幽傳のものふして、千年
のまよひ代人の耳よハ、もとをもくやうとうづくらしうを、ばくへ

漢説は理、届小おもぞれく、律曆カタカタと上古のを晦カタカタきゆき、暦カタカタの小も
今世おもぞべる、渾天説カタカタとくらふく、事をもひやく小かくカタカタ小も
此渾天説は事ハ天經或問は詳カタカタなり、天經或問ハ西洋の舊説小て、漢土よて明の萬曆
の頃、古聞の遊子六ロウジ一者、西洋人より學びにて、萬曆三十二年カタカタ署サシハしたアふて、主カタカタもうる所渾天説カタカタ、その三十二年カタカタ、皇朝は慶長九年カタカタ小やうりりたゞむと此書乃
あうべに渡ア來カタカタ、寛永カタカタ頃カタカタてやとおりふきり、西川正休カタカタといふ人訓点カタカタ、梓
行せハ享保十五年カタカタかれが前カタカタ、既カタカタ官カタカタはとほりたゞカタカタくかく梓行せ
よりあと一辛丑カタカタであります百十一年カタカタぞううふやむりたゞカタカタ人、近頃カタカタてハ天文學カタカタなど
をもの事カタカタのん人カタカタ、渾天説のあもくハ、是より以前ハ蓋天宣夜カタカタひハ平
荒カタカタ、あがく知もるやうカタカタ小ぢカタカタもる。天カタカタをど、皆漢土カタカタ人のものとカタカタがさとくりて、どりううとカタカタどもカタカタひ
し、因准カタカタせてきてのことを來カタカタと、遙れ西の海カタカタ、さる學びカタカタばよ
かカタカタきカタカタ出カタカタて、地動説カタカタとつことカタカタもくろうひカタカタ、此説の最初ハ、皇國カタカタ寛喜
二年カタカタよりる年カタカタ、實徵ミツシテと沿カタカタり、漢土カタカタて、宋の理宗カタカタ王の紹定三年カタカタと、蒙古カタカタ太祖カタカタが回國カタカタと滅カタカタし
もう九年カタカタ後カタカタ事カタカタ此時一天四海の大君カタカタ、後堀河天皇カタカタれカタカタあら

たゞあきその實徵と得て精説れ最初少くを河も佛書をも
立世阿毘曇論と佛の懸記とて出せる後世よ外道りうて地動とい
て人と惑ふべといひて説ハ記よげ回國をどそ、往古より實
はゆうと傳へようぐ其説にすこりとくのうりぐらう
もじかるれ、すまう神典幽傳の正説少くをは實徵うづくもの
をドウシキを考けり、かく今ヨリて西洋の國これ渾天乃
舊説えどぐく破きをくらて、地動の神傳よちんねらううぬ、
かくやうくはい、文明五年の頃ようて、明憲宗とひ一西洋にて、つゝ既く
王の成化九年よらねば、じまでもすそ三百七十五年をべ一西洋にて、つゝ既く
神傳よたらくマトと、是より百三十年ぞう後よなり天經或問の
中、少く地動の説もすこざる度數と三百六十度とて、ちくは渾天と主
有奇とふと用がる西洋の實徵もすこざるてよあらねど、ちくは渾天と主

トドカシギハニヒト漢土舊染は除こうびてやうおうりる、さく漢土
も地動は實徵よろけて、上下おーちて從ひたマトハ、清の康熙二
十三年少く、暦法もく六くとりよ算とくらわハキテ、もく細密
なる所く、西洋の考小ちとぞくられ、東方は神傳極西よ
けうするがつづく本よから来て、漢土すでくの神術よ化せよ
たまむく、い小もうちらよ紀きともなうべや、此康熙年中よ作りた
暦ちうは二十三年ハ天朝は貞享元年かれば、此暦法之を來て官の有く、時憲
つゝハ享保の初までかくべられりらおさせ後、アリが寶暦の御改暦から寛政の
御改暦も、是小や、あまよらうて按へて天朝小も神暦とくらひ小、神傳
み地動説よ立歸らむとくづくべ、抑へうへそびのうづく
も出來、享保の末年よりくると、きづく百年よ餘アてれ今よ至ア

て、大八洲國既よもほへゆわるとおりべど今より後の百年
小も何事なり神傳じんてんのよとと小もしうづぎす、享保けいほうの末年難波なにわ契冲
荷田宿はたしゆ称めいりうて、律令と正ただし國史と講せはなまし、古學こがくをよもとき京きょう
トうりと加茂翁かものきのおはなきあたりし驚おどされ、鈴屋翁すずやのきの古きと考かて今と明あらふ、本と
本もと、未と未まとまて、外國ほかにのよもと明辨めいべん心こころひる心こころすれむなまくびきつて、地動說ぢどうせつの
漢土かんとでさうすりそーと、もと同ひとじきいちうかがま、古學こがくの普ま世間よ弘ひろ
々ひひりと、享和寬政けいわくわせい頃ごろといをよもう強ぜ言いすじうし、地動說ぢとうせつの西洋諸國せいわよしゆ
小普こまくちうと頃ごろ清きよ江康熙こうき二十三年にじゅうさんねんまで、凡ま四百年よもう、初はじび、今いま後あとの四百年よもう、世間よもと古道ことう天下てんかをきわれるふうづうづ四十よう年ねん、
せぞききもうがしてかき、すす千歲せんじの今いま世よの僧そう徒徒の称めい言い、末ま世よ下げ根ね
衆しゆ生うとはうもみいよめき、そハその方が行は法ほうと獻さひさく、身みを安
樂らくよりよむじ乃の道みち、辭ことよそそのりり、孔子こじんの聖語せいご
ぞよく當あるる、されぞ卜家ぼくか神書じんしょ名文めいぶん人じん後の天地ていて生う、而は知し天地ていて之の

始先天地、沒而知天地之終、天地始終在丁身。と見え、嚴君平子の
註も、天地億万、而道玉之と云ふをもいづまとぞ思ふ。

隆正

詮も、天地億万而道王之とづくをもいづますがれども思ふ
やまやあとば

と、大和詞と云ふとあらまが大和のうそば、わざとふ
くちる。今世も猶、大和詞と云ふ事多く、今は世も
まことにやまとをばとは云ふ事多く、万葉集ヨウセイシキより多くも
多くも上つよアのうのうりがくと考ふるが、大よ四段ヨウセンやれ
てぢんじるやまと京ヨウりゆびのうひ、あそばつうひ大うみヨウミ
く、今れ京ヨウりゆびのうひ、あそばつうひ大うみヨウミ
がいり、鎌倉ヨウシカ府ホウたらすより後又うみのうひたゞひ、長流契冲
ちんそおもろう、眞淵翁江戸ヨウドにぞくすとすみびとれてこれより
うみのうひ、おのとみの定めは博士ヨウキサよりうみの四段ヨウセン乃
うみがうみばくはうさとあそばづ、やまと京ヨウりゆびの

唐土は詩人、古體今體を問へて作るが必ずかぎりあやぐの道のまぢめぢうきうもれど草庵集とあるまれるいきとゆりば、新勅撰より後はうきもくべつまでもけひし、賴朝卿總追補使とすうす大名小名とよびたまうへハ世はまゐ革アラタするとき、うみのまゆもあへてうきうからうへハ世はまゐ革するとき、變るたゞよその風かそれると見えばくばう道シテやく世よづくりすよやんひりする、賴朝卿實朝公うらうて、歌とあるまき、實朝公もあらへ萬葉集はふる紀をがさとうりされうて、歌と後をひきぬきうてうれく京と、基俊朝臣は二條流と執し、鎌倉より實朝公の萬葉風とおせん人多ううたり、爲相卿と

鎌倉よりうて、鎌倉の恩とまろことぞれり人ぢれぞおほづく鎌倉
は萬葉風とよみずれりうて、あともうう二條冷泉の二流ハシテうふ
ゆうううの實朝公以後行おひも、鎌倉乃萬葉風、まもの萬葉
風シテ、顯輔朝臣基俊朝臣は、六條二條の流義シテうひも、歌
みうちらむうううう先も、爲氏卿爲相卿の二條冷泉シテう
い合ハ、此ううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううううううう
契冲律師シテううううううううううううううううううう
契冲律師シテううううううううううううううううううう

あくまで、いま、用ひうることあると、よ
する上手をもぐたぐり、千引の石、
さくひらく、もつまれる、上手をうめく、せんじゆく
くわるといふと、千葉蘆菴と、一はぐくの
上手を、うめく、それ、またのやまとちくび
く今みゆと、ざうのと、じめんと、集と、手を
く、古體と、もんと、万葉集よちくい、今體と、よゆんと、古
今集と、ますまつて、もぢり、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載新古
今、かくじびと、べく、さく、新古今と、雅調と失ふとぞ
す、雅語俗語と、さうのと、さくじと、人へあつても、

も、雅調俗調をもども、俗調よきぬやう心がくべしも
と誦まればのとての景よりうりびよのうとせば、よのと
せ情よく人の心よとゆきぐらうなり歌とよれうと定めて、古歌と
ぞよきりよもよどみすでよくよまうともとくわざくべ
づくはやれ流義とくくとせむ人とその垣内よれいにきんと
ちるうきはうじきわく、又萬葉集ハ代集とよくよくも、人内
うきはうじきわく、又萬葉集ハ代集とよくよくも、人内

爲朝死生の論

世の鎮西八郎爲朝ハ大嶋にて自殺トヒトリモ偽リテ、實トモシテ
節琉球小渡マリト、ソニ説レモシド、彼國モハアリト、真うれども

在嶋中は事々官軍と戦ひしも、切腹とること
疑ふし、其證といふ事、中山世譜云、辯天王、姓源號尊敦父、鎮西
八郎爲朝公、母大里、按司妹宋乾道二年丙戌降誕宋淳熙十
四年丁未卽位宋嘉熙元年丁酉薨在位五十一年、壽七十二
と云う此乾道二年ハ、を約そら六條天皇の仁安元年よりうく、
爲朝いやう大嶋々居住せ一時かう、保元物語卷三、永萬元年
三月、爲朝鬼嶋々渡アリとひそり行は是ちふくら、南洋をも、鬼
界嶋東洋中より人をも、鳥と寫ふ、はぐらかれて、やがて琉球
よわう、彼國を押領し、その妻の婦人と通し、翌仁安元年辯
天王と生い、此時爲朝
廿八才其證は世譜、乾道二年降誕と云う

此年我仁安元年又いづの考證、琉球神道記といふ書
此書ハ弁蓮社袋中といふ人作なり、檀王法輪寺、中興院開基といふ人作といふ體裁、
片假字にて、彼國の事蹟とぞ、自序り、其文トテ扶桑國東海邊裔之貧士
也、中不意至邦籠桂林經三箇年星霜爾有國士黃冠馬幸明語云吾雖神國昔未
有其傳記願記之我他邦之人何知國事明云我粗聞所不記問知人請頻故諾爾據彼言
恣注固蘆德号曰琉球神道記于旨大明
万曆三十三年龍集乙巳四月之望日也、中口鎮西八郎爲伴、此國ニ來リ
テ逆賊ヲ威シ今鬼神ヨリ飛礮ヲナレ、亦此ニ留リ又今鬼神ヨリ一日ノ行程ナリ
とりまと出さう今鬼神と、琉球の近邊なる嶋とぞえて、自殺と、さ
一日の行程の處なり、是まづづくまゝに鬼界嶋よもよもそら
永万元年よわじ鬼嶋カガ、志うと世よ大嶋カタマ、自殺と、さ
少きゆべとて、保元物語とぞ、人むらか、傳信錄國志畧
等の書、朝公とて爲朝れたの出されど、

阿部多知婆奈

東平

万葉 十一卷 小吾妹子不相久馬下乃阿倍橘乃蘿生左右と
と畧解よとくらやく、あく橘、甘橘も、是即いあく橘の事
すくべど、と翁いづれき、さふど和名抄よ爾雅云、安倍太似
知波奈 橙トウガラシ、トウガラシ、心得ぐれ說なり、
小也、とけりもぐく是よよりべし、といつて心得ぐれ說なり、
大も今れ橘とて、あく、橙とけり尔從ふべし、といつてすくべくと、
えの橙と、何物ともあらずぬよりてちん詳キヨ々通えぐれ、されば
今世一薬種よ用て、それが酢トウガラシ、橙醋トウガラシ、
俗間のいわゆるタイぐ、といつて是とて、色も形も柚トウガラシ、似つらひ
くべく 大形オホブリ 醋汁スキニル 多く、甘味いづく少く、
枝ハサゲ 醋カク 中春以後まく

汁すくに苦味もうまれゆけしるは甘某と
うかれあるは小甘味と帶ぶ物ようべ
違へまば今け橙よいめあふさく小疑ひもじし、あうば和名
抄け橙字ハ、阿倍多知婆奈、と名おひく菓^{コミ}よ填てがきくらけ
えタイぐやくのとまづさくら御^{アテ}く、さて馬下乃ハ旨味^{ウマジモノ}アテ
阿倍^{アベ}ハちかとら甘の義^{ウシモ}アテ、とつ舊說^{ヨリ}うぐれバ、旨味甘^{ウシモノアベ}
橘^{アゲ}と字を填て心得んと、うふいぞれくぐり、さやく、袖^{コスモ}よ似て
袖^{アゲ}よくらひく、甘味多うる菓^{コスモ}、今^{コスモ}の蜜柑^{アゲ}とおもそりゆく、ごく思^{アゲ}これ
種^{アゲ}もの蜜柑^{アゲ}、うふいぞれく、阿倍多知波奈ちうざき、あうと古
事記傳^{トキジク}、非時^{カグノコトニ}乃香菓^{カグノコトニ}み橘^{アゲ}ハ、今^{コスモ}世よいふと異^{アゲ}て、蜜柑^{アゲ}を
とく考^{アゲ}うへ、なうくよすく、で香菓^{カグノコトニ}ハ、今^{コスモ}内橘^{アゲ}を疑^{アゲ}ひ

かくとやうべ論もづきあらひんをも、また長崎にて、永章光輔ちよざさゆ
年もとより、物産家と名のり居し、太田豊
すひひきは、又按よ、多知婆奈ハ、ちよ傳の説けがくくよて、蜜柑と見
る方やもうるをり、さて、阿倍太知波奈と同菓、そ、花々
えどくわど称つふとくひも、名ハ多知婆奈食料の方小とくと
き甘橘といひこくらへねぐべト、かくとひもいく論めりふ、どううひ
物實ちうぬはれども、垂仁天皇は大御心とくと、田道間守よおは
せく、神仙の靈域ちく、常世國すで覓させきくぞくうけ、香菓の
橘ちうだく、聖武天皇御紀より橘者菓子之長上人所好、
柯凌霜雪而繁茂葉經寒暑而不彫、與珠玉共競光、交金銀以
逾美くも見え、万葉よ、葛城王、橘姓を賜ふ時の御製詩とぞも

家持卿の長哥をとよのほりは賞翫をくへ、漢土小ても酉陽雜俎は、天
寶唐玄宗十年上謂宰臣曰、近日於宮内種甘子數株、今秋結實
一百五十顆、與江南蜀道所進不異、どうも甘子やうて密柑なれ
き、その賞翫もろとも想像するべくして此甘子よつとて辨へれりよ
りて、續紀神龜二年比條は播磨直弟兄初賛甘子從
唐國來、殖其種、結子、どうも甘子、今れ柑子カウジ、密柑の一種たゞ
ひそみてしゆくべく、初字いよくよう皇國よなれと、初て賛うべく
一物ゆゑよ冠らせられり、因云、田道間守を遣もりあし常世國計事、種々異説
云々、今朝鮮は地方も、此島の柑橘を產して國珍と、韓國より田道間守乃先祖は
地されば大御使シモ出らどもりと、これ説、やうて紀小る、神仙
仙祕宮シモンガ、雄略天皇の御紀は蓬萊山シマツヤマと、かばうあめ人の、あやまくゆきよへて
地をね、天皇の大御稜威と精忠の真心と感もあり、神仙のまちびきりて、當時

かくのやうやく、紀記の文とよよて知らるゝ、然ると田道間守の、天日槍の後を續いて
一向宗の故郷から、新羅よりきたつゝむといふを後世のいふと、神仙の靈域を得る
やうの元骨の人に言ひうらし、本草綱目より宋の韓彦直が橘譜と引ていづるやうに、
かくは柑橘の類種をいづくは柑品有八、橘品十有四、多々是接成
者氣味尤勝、黃橘扁小而多香霧、乃橘之上品也、とうとうてづら
まゝ、蘇州台州荊州閩廣撫州、またより出る中より温州のと全
上品ともいよ、とす、皇朝小す、うめ品と分別ばいくそぞくらう
ざきえもさあらげれど、中小も世よ名高き一つ二つと云、ぞハ代
紀國雲州などあぐべ、唐蜜柑と称すもぢよ、紀國けりうとを
筑紫君磐井とト仙といふ人殺すといふ説、直養

豊前國上毛郡サムライ求菩提山 護國寺縁起云、人皇二十七代繼體

策紫君盤石井口卜仙之人殺志一說直養

直養

天皇二十二年、狗岳イヌカ、求菩提山の有テ鬼神惱ス人民、開基ト仙、以法力降伏之封カタカタ甕埋於嶺上、爾後祭其靈ナ云、鬼神社ト、ゆう、この縁起古書と、凡て、されど古傳說と、そのゆう小記せよ、あくまやハ疑也。釋日本紀より引く、筑後風土記云、古老傳云、當雄大迹、天皇之世、筑紫君磐井、豪強暴虐、不偃皇風、生平之時、豫造此墓ノ人形原の石室のところ、以用ふけ官軍俄而動發、欲襲之間、知勢不勝、獨自遁于豐前、國上膳縣終于南山峻嶺之曲、於是官軍追尋失蹤云々、又日本紀繼體紀ヨ、廿二年冬十一月、大將軍、物部大連、鹿鹿火、親與賊帥磐井、交戰於筑紫御井郡中畠、遂斬ナ之云、此紀云、磐井と斬ると云れど、風土記云、方古タモモ是と云ふも上膳縣トキミ、毛郡ヒメニ、和名鈔云、豊前國上毛加牟豆、美介

とうり、美介ニ膳宇をうへし、御食すうは義をぐれ、此郡にて南
山峯嶺よりよびき、縁起よりいでたる狗岳より外小ふし、此山も以
高大小して、彦山よりあくびざれど、かの御井郡より遁き来て、の嶮
岨とれたの、たゞゆきりしづ、兼て乃暴虐をやうべして、此邊を劫
掠し人民をあやさしと、ト仙といふ豪強の人へての山に住
るが、衆をひきわめしと攻め破り、遂に殺して、雍毛ミタマ山頭に
埋めし、それと以法力降伏として、例の縁起の文をす、此
山の坐首長宥翁の物語と、小狗岳キヤウバ行場と、一頃上りて
は、絶頂より大なる石をとある、其間より古き甕瓦カマリを下へて
いするが如き、是うは鬼神と、封ドころもあらへまをすやうり、

此翁ハ和漢の學は長し、歌ともかこゝる古物をあめす、たのう
莫逆シテ此說とて以來鬼神社と改て磐井社と云ふもあ、此縁起すべ、風土
記日本紀とよく符合し、ねどばかく後人付會もよべりなど、
縁起中より、磐井はてゐなれてなきそりてあり、ば疑ふづきあや小
いば、あうれば筑紫君磐井と、求菩提山の開基、ト仙といふ人
打ちしもとひゆく、何のさるたぢらゆ、第一確證とぞども、
日本紀も繼體天皇二十二年、縁起も同御宇ニ二十二年ナリ、
あくまで元もとをもあくより開けし、山うへり、
山口葉をうてある人にむへ猶いとぬをとおらう言とれもとゆ

ひづち考

妙玄寺義門

いとほは云いとほと云語と語と、乃異同附つまみのまくら

いきぐ今一まほ細やうふといひつひで小後撰 恋
のある哥の、うすれまでざと、とひひるふ答へり。我ら
ゆく新撰字鏡は、俗徳と僻也、須牟也^{スムヤケレ}介志又伊止奈志^{イトナレ}
よりありひ定めりそ、けくさかの花鳥とされも云云。哥ちど、其意
通らざんきばの趣、卽葉よいづか如^{ハシ}、僻の註、正韻と僻徳事、迫促也と口々韻會
す。よりづき、恩とも同趣の語なる。往生礼讚より人間恩^{シテ}營衆務不寛、年命日夜去、と
ある等は考へて、うれ足のいとむおうじよ、足のいそぎ、うれせ、うれたゞし人間の世事うへせは、
とそがり、ゆきゆき、ともくよぐ、壽經の世間急いをども訓がる所とい然にて、ハミズく、
ハミズく、ハミズく、ハ件での急く足のいとむきも、穏なまねうやども考ふを、
無字は意よ、又然といゆべよ、いづともふるえとくとねて、立粧^{リメイ}墨
染の歌はおほあわく字、改觀抄^{ハシ}、おほまわく初學^{ハシ}、あづけむ。

うるうる、どうも意見のうら立ちがくて此ひとぢれのまこととみみ
ゆう、あれはあらぬいせ乃海にまのまくぐく、しるすはく、おうよ
うるうるとぞ恨むし、とちをかく古哥の第三句れ、餘暇ひきだはよう
てりふ意をもとばす、異言ともあふく、此ひとぢれのまくぐく真
淵の無負氣のかよ、同ドうで、契冲の大けやくは説のときおもひ
頬そぞ荒けむく、ひきむくねどつふもよ同ド、つとの俗すむせそくもま
せはたりむ、うとりと同、其事其業なほよ、かいまくはくくつよ
うやうさらる事なり、源氏若紫よ、十月よ朱雀院の御幸ゆく、
舞人ちど云云、ともぐく行ふもふく、とらむを考ふ
をし、ゼワシナクイソカハシとリふ俗言よもそくられ、然よ湖月傍注ゆく
をさくとももハ無餘

暇まで、まことに、今一言かくよめやむくて、何もうそとちくて、すゑを、舞をよみけ
いよもひきよし、外ようづくよみを、ぐらうて、どうよとふりうて、文詞すべくよ
あがや、但し無れ字乃意をもじるもぞくをもぞれをもぞくをもぞくをもぞくをもぞく
ゑ、なく又いそがしくせはれ、とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
以ひりてゆげば、ひとのよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよも
也よ、足のつどをれ恋もももが、と、うすすすす、足のいそが、と、きとまとも、
足の眼をれともとも、まくびもゆねが如き、と、少くべども、とぞれ
ぬ、とぞれ、づく處よよて、ハキハキ、とぞれ、とぞれ、とぞれ、とぞれ、とぞれ、とぞれ
くく、うきびるる、ふく、花鳥、うまれを、あ、など、とぞれ
ちく、花をとらは、とらまど、とぞれ、とぞれ、とぞれ、とぞれ、とぞれ、とぞれ、とぞれ
浦のいわゆる、さくらの末よとぞれ、とぞれ、とぞれ、
やもよれ、後撰、哥よひやうも、しめれ、とぞれ、とぞれ

かにとひよと同事との心得あるて、かとい粗き口ひもしめれど、かく
もりぐありづくよ意義いさの背くもむ、但し無暇ハ五言七字
短くとすばじまむまちくもいそくあれば、前後比趣小よりて、
さいしきわざ所もあべて、まくまくはあとりよとふと
同じおもせり心得すれど、かく思ひてけつゝんで、上よ引け若紫けいどる
りま、湖月こゝろ一本も、即ちあたれども
まど衍文もがく、さうらよま枕草子春暉十二、いとすがうてあくとやんごと
りじ二字入るふやあく年云々あよことし云々やうどどもよく思ひみべて、こそつてよい
すれあはえあよことし云々やうどどもよく思ひみべて、こそつてよい
えいきまのまてがく、うけ海邊テ蛤とよまの沙中ようる、其うく
もうと、海人ひといふとくもとくもとくと詠うたう
は説よ從ひてゆぐ、先もありふ、夫木ササすてぎふ、いふものうれつも

不食宍

東平

ノリノリ宇神には御^レづく、獸と獮^{カキ}とをせなすいトハ古事記日本紀
かど小載らまくとてもく、神前^{ヨシモト}奉マリ事のうとも、祝詞
式其外の物小も何^レととススムラ、もうれば、獸肉の食料^{スミ}著
明^{ヒル}きづくよ、天武天皇の御紀^ヨ、自今以後莫^レ食牛馬雞犬猿
之肉^ヲ以外^ハ不在^レ禁制^ト、うふ拵^{ミハ}五畜^ヲ食ふと^ト忌^{キラ}をれ
すとも、自餘^{ノソトカ}ハ公^{オホヤナ}小もんこ^ト食つ^ムと、孝謙天皇の御紀^ヨ以猪鹿
之類^ヲ永不得^レ進御^{スルア}との御^レ捉らまつ^ム、ひきぶる僧徒^ヲ用^ム天

下とすつゞせむ御あやましよりふととちほざく
小見過ぐるもりし、ひづれども、神代よりて猪鹿と獮
とりにまへて、國津神の御事ノサ天津神の御上ノサなり
古事記の八十神、出雲風土記、大國主神とことじみ、古書
ども小山猿シマウラ、國津神のミタリトカミ、庵アメニ、
さびサビは意外のミタリ、大國主神ミタリ有功イサフ
御上ノサても、牛、宍と田人アヒ饗スルて、御年神の御怒ミツハナにし
よ、古語拾遺ミタリ、妻問ミタリの事
ちども、天津神ミタリ御子ミタリて、其事其物と造作成ツブリナシて、
あめみゆとさはゆて、國津神のミタリ淫情ミタリあは
き、神典のミタリ、ミタリ諸國クニて、神司カムツカラのミタリ奉仕ミタリ社ミタリて、嘗ミタリ

御制度より、御紀其外ふとぞりくをもとづらるゝ、さよろく
さゆかうての御制のとくやうおちうど、めいづる、神祇令、凡
散齋之内、不得弔喪問病食、鎮座本紀小諸祭齋日不觸、諸
穢惡事不行、佛法言不食、冥、どくえうれどもどり、此類いのす令式乃
引出むも、うもバ祝詞式ヌ又えうどり、祭、冥、あくど、生
所狹きよばくとぞ、あくと、神馬を立奉るとあく心ぞ耶モ盛、今世大内ノミハ
アムシ、あよび大名の方、おわらむ忌ひなじみ、きあくわく
く、おうが天津神の御心と御心と持ふと、ごくまで、さに大御
國おうをうへて下さぬも、心ひきせんとぞあり、近頃ハ江戸の
表通の店こそ、その肉と煮て商ひ下す、彼方此方ふきえうらづより、富子モハと
（やえざれど、穢多村とうづくらやうさうふ、それひきど家へあら火と改めて

清淨きよせいもとれば、穢くもうけとひく、往て食すうべとぞり、とぞり、
ほづくとぞく、少すまうとぞれ馴て年月と經る間、いづれ心と許容もつて、良
人、いづれ、すくら
う、多く多うるも、さうおづく漢籍かんせき參渡さんと、後ハ進御しんぎ立奉
ト、すむりと、庶人ぼくじんそ、喰くすきも、うへ行ひ、よもゆきも、ぐく、うハ
ちは内七言外七言延喜齋
宮式の忌詞ととぞり、文保記廳宣
すゞか、禁、經教、忌、僧尼、誠、妖言、退、平覗、皆神明之遺勅、とくと
ひづくよ思ひかくして、ひづく行ひもと、あやかく、ゆく、いよいよ詰り
うはあくびう、事は因るべ云、退正覗しりぞ、正覗、乞盜の類ひづて、和名抄わなまつ、正覗和名
盜海賊とうかいぞく囚人きゆじん、か、一つ類たぐい出されらうもんね、神主祝じぬゆき部ぶ、同類どうるい、とくと者もの
みく、今世呼よ寄よ美古みこ、梓タチバナ美古みこ、者ものの類たぐい、う、う、汚穢不淨ういだいふぜいの連つづ
忌のぞまく、退けよ、よ、や薬食やくしょくとくとめの名なと施ほどて、猪鹿いのきの宋うじを忌のぞば
らまく、う、う、牛肉ぎゅうにくちじかうとくとめの近づくやうれすうと、或宗もと、公こう、肉にく食く

まことに、もとより小心得て、人前より憚らば、黒衣は袖より取出テ煮る
類ひそへらる、宗祖の心や、うちかくもじぶりやとぞ、

四季十二月名義考

隆正

古くハ祝詞ニ、此名義を説ケル舊說也。うとひもひでる
まんもよづくもれぞいつむべ、うきまくをづきちども
すくいわくすくすりくく、うき新說也。うきめぐらすくすりく
べれど、それもよづくもれぞいとび、

奥津御年といひ、後世まで、拾遺集などもよし蠶養カタも得たりと
すらるてぐくハ稻とぞとてとくとく、ちまふようてありバ、四乃とよ、
つゝの名、そひのきういづまよ稻よよわるをちうべく思ひまく、

まも小より強説レヒゴトしてまろそひとるハ田と墾ハルさわれぞいふ
ちりべ下タレツクぢつも馴着タレツクまろ苗ハサキとくらるようそざめて莠ハサウエとくらむぞ
此事タチ馴着居タレツクあわせれどいふちくんハサキ、なまくすく懐ハサキとくらむ馴タレツク
附タチ馴附タレツクやろちく、赤人主の歌タチよ、くるはせよすみれつやんこハサキこれ
そむきとちくらうハサキ一夜経ハサキよりとよまされゆるちくらうハサキもとむき
うくによハサキといふれくらうハサキ、ぢくといふよハサキのあらをもせんともりよ
ゆくらうハサキあねとまでひきりでくらも、秋ハサキいきれんちくらハサキ、祝ひた
る名タチちりべ下タレツク又明アキラの意まで徳の赤らぶタチをりふの、ふもハ恩賴
みふもすりべ下タレツク、まもれあもとひふと日本紀タチ日本紀竟宴歌
等タチよ可えくる古語タチ、神嘗祭タチとまらうハサキをも、ばふハサキや

あくみ

古事記傳

秋ハ農人の手あくよよりそつゆう、又刈されぞ田面の空
よもうてりふうよむすてーとひくうを、冬も殖は義少
いふぐきくまう木々さる葉かきわらく、田の土のふゆうふくう
あくよりよもあくよーとちく恩頼のあくよくう

ちゆくーん

ものさむ蒸つまむあくろ、陽氣地中より蒸して、梅は花もさ
れ草もさえ、田地も稻種も陽氣を含み、發生せんとてあれづ
底よむもじにうれバ、蒸月ムツキとひよむくべし。

活語の活用と省みてづく一格り、合語格よりべし、通

畧延約と狼アシカとぐくねとみよー、通畧延約辨アシカひもくう、
たまうぎのさハ城シテめうちう、さシテ更タラう、下のさハ置サキたり、
城シテ更置オキのあらう、わまねと畧く例シテる、合語格よりべし、
躬恒集アシカ苗代アシカあそひいやくつゝさうり、順集アシカ苗代水アシカ
ぬまくつゝあそひ、苗代アシカたぬまく小畦アシカと作シテるといへ
ももくつゝあそひ、此畦アシカと作シテるといふと、城シテ更置オキとく事アシカの心アシカ
かくう、二月ハ苗代アシカとまよ畦アシカとほくうて、更タラ田の中アシカ城シテを置く
またう、城シテ字アシカとらつとばらうアシカくゆれど、もとがすアシカよがま
てく人アシカとくよせぬ所アシカとくよつひく、苗代アシカのいろや

て此あらわら、あまふらうて城更置キサラオキれしるをとくも。
やういは漸く成長オヒ中のやれとつめよといふ合語の一格也。
苗代の漸ヤハクいがみうらだれをりふ。この更置田の中へ植シテ置く
うき植月ウキツヅキなり。うゑをしるつきられをり、此をババシ。うき
とくとく。同前。外語等。題本。この更置田の趣テクをも
うきとはいわひうらは苗の名なりとある。あひうらふ
と。此名うら。俗ニサッサトノビルといふもあら。此うらの雨と
うらざれど。此うらの蠅ハバとさどどりふ。
うづき乃ウツキノ後見ウツコミ。看病カムヒ。ふる。御ミヒルごうよたま
うどよ。看懷月カウハツキ。のちうぢうづくさなる。ひとつよつ。先

うす合語の一格也。夏ヒマツよりよてのあらわら。條下シテ見合す。一
あづきハ穗ホ見月と。合語の一格也。音と轉ウツく。
うづきはそハ。そしにそくとそくと。うづき。うづき。うづき。
詞行ハタケのそなぐ。稻の實ハシの端ハシ。そい。うづき。うづき。
うづき。うづき。うづき。香カク。潤スル。やがて。うづき。
うづき。うづき。古語。長秋。長五百秋ヒサツ。うづき。うづき。うづき。
うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。
うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。うづき。
稻刈月ヒナツ。月と。説も。日。

かづき。釀成月ヒヅキ。そ。まけよ。か。な。て。不。用。す。夕。つ。ま。て。の。

もすくん

神嘗祭カムニヘアツリ 大内までハ十月行なフセコマヘドモ、民間まで
ハ、八九月よりちりめで、十月モちりめでタク、萬葉ミツバ
かづらやセを尔倍ヒヨモトモと約するハ、秋までそありルも
嘗カムセろとシメテハ秋の祭をひふ、嘗カムをなむるこうろよ
もすくんハやろし、尔間モハヤねと新穀の酒を用ゆによ
り、醸成を月の名号カタナハにせし、モのあし十一月の
モ十月よりや醸成カクシセシ。

もすくんハ田のこまのあぐまも一もぐつまぢれどりふすくん俗
冬ヒマツの、一とされどもじよシモゲルヒリ、古語のつままなをタベト、霜と

もすくん名もすくげさるもすくればりふすくん
もすくんハシラハシラハシラひち約するも、ハ、發聲の助言、干令淺ヒアス
冬ヒマツは田の水ヒメをもすくて、干淺ヒアスるとす名すくんスヒシメト
ハハハハのヒと同ヒシメくいである、水ヒメをりふのヒもすく
もすくんハモスヒシメ、稻ヒシメを田のヒメとひく、猶ヒシメんとヒシメ稻ヒシメ
つすくねヒシメ。

速吸門考

直養

古事記中卷神武紀小、即自日向發幸御筑紫故到豐國宇沙
之時、其土人名字沙都比古宇沙都比賣二人作足一騰宮而
獻大御饗、自其地遷移而於竺紫之岡田宮一年坐亦從其國

上幸而於阿岐國之多祁理宮七年坐亦從其國遷上幸而於吉備之高嶋宮八年坐故從其國上幸之時乘龜甲爲釣乍打羽舉來人遇于速吸門畧故從其國上行之時經浪速之渡而泊青雲之白肩津

傳曰神名帳より、豊後國海部郡早吸日女神社あり、此地にて此神名よりなる地名ナリ。或人豊前の早鞆浦のことをもむるもよきて、地理たゞり、書紀のつゝよ、とうする宇佐より前よりちとぞらうべ、此一段の事、書紀より、日向冬川と發坐て、宇沙より至り坐し前より、此記と次第異なり、故思ふよ、此地名正しく、豊後國よりもバ、書紀の傳び、正しくかく、吉備國より難波までの間より此地名うるよと云ひ

此記ハ此一段ハ次第に亂つたり考るに先初より自日向發幸筑紫故到豊國宇沙之時トヨリ日向國より筑紫にてナリ、夫より豊國宇沙よりでやんこはて小あくを、日向より筑紫今ノ筑前ナリ九國の擅名ともよ等より時豊國の宇沙と過て、夫より筑紫よりでやく、されど自日向發幸御筑紫と云ふ、綱の文ナリ、故到豊國宇沙之時トヨリ目的の文也、其つより、自其地遷移而於筑紫之岡田宮一年坐、ヤハシハ是が實より宇沙より筑紫の岡田宮遷アリてまくとかけく、ナリの例よりおもへる所、亦從其國上幸而於阿岐國之多祁理宮七年坐亦從其國遷上幸而於吉備之

高嶋宮八年坐とあるがの岡田より大和へてす、道ゆき
れ綱の文にて、故從其國上幸之時、乘龜甲云々故從其國
上幸之時、經浪速之渡云々て、岡田より大和へてす、
道ゆきの目の文たり、もと綱と、前よりうりよへけせ
目と、後よりうりよへもと、文章とうやぢくらむ、さて
前より順に綱は目とつけて、次第小ちし、速吸門を岡田より、多
祁理より間のとくまく時、白肩津と、多祁理より、高嶋
までの間の事とま、もとくさや、されど、浪速の渡より經ふて
りまへ、是ハ高嶋より、大和より、間の事とま、もとくさや、
多祁理と、高嶋より間の事とま、事ちけま、目くびきや

なぐさかる、筑前の岡田より、安藝の多祁理よりす御道
をとらは、豊前の隼人ハヤトモとべ、かくしへ過ぎせたすふべをりま
早吸名門と、隼人の瀬戸ハシ事ハシモノやくべー、今此隼人ハヤトモよ、隼人
社とよぎりて、毎年十二月晦日ハシタの夜、向ひの赤間關龜
山社の神主と、此社の神主と、双方よう松明マツメイとりて、海底マヅシ
に、潮マツシおのづくわやうれ、底マツシむる若めマツシと苅カスガ、社頭マツシ奉マツシ
ちう、此時の祭マツシとめううの神事マツシとひよ、又六月晦日ハシタも御
祓マツシの神事マツシとひよつきて考マツシる、書紀神代紀マツシ乃一
書マツシ、伊弉諾尊マツシ追至マツシ伊弉冊マツシ尊所在處マツシ中マツシ乃所唾マツシ之神号マツシ
曰速玉之男マツシ中マツシ此既不祥マツシ故欲濯除マツシ其穢惡マツシ乃往見栗門マツシ

及速吸名門然此二門潮既太急故還向於橋之小門而拂濯也。とあり志うれば隼人社ハナム、速玉之男社トモベテ、六月十二月のうちだりてももりよべし。此隼人の湍門を潮くやくてうづの巻とおびきしそのうづの海底も吸ひこむて殊のやう早し。因て早吸の名も行ふ。又書紀神武紀、東征至速吸之門時有一漁人乘艇而至天皇招之因問曰汝誰也對曰臣是國神名曰珍彦釣於曲浦云うる珍彦ハ名モトアリ又万葉卷六より帥大伴卿遙思芳野離宮作とつ歌うる隼人乃湍門乃磐母年魚走芳野之瀧尔尚不及家里ナシと畧解す。薩摩事也。

うけどもされあらば、此歌は前後に出でるゝまで、筑前の香椎次田などの歌ぢれば、かけもねもる、薩摩ぐの歌一首ましくもすく隼人ト、薩摩の冠辞モともうもかまと思ふ。此歌も此早吸名門のとわざと掲焉うる波夜登母と昔より隼人トがきことありふ也。

多那具毛考

隆正

古事記曰、離天之石位押分天之八重多那雲而うの天之八重多那雲とよと、皇國少く天學と興をぞ基本よちんりふ、抑皇國の古傳ハ、微言も無盡の意と含めうりはりとぞれを推究むき、天地間ううとある萬のと、具う足ある玄妙不思議のとみ

小ちん、天文地理の學、萬理のよもとあるとあらむれば、かういふ
事トあらきつてゐるもとあるべからずとふく、唐土天竺西洋の國よ
もとの學トつづり、その學つゞくよこの日本トもわざりて來く、そは
事トつづりけり人多く、いまいこの日本トても、天文地理ト暗クラくびむらす
きう、きうへらまども外國の說とのべあらすでふく、皇國の天學
を興スル人ハ世ハきあらべ、あまハもよも外國の天學ハ中ニ
よろづにと撰ビひく、うは古傳の微言トおー究シりて、皇國乃天學
ともあらんとひき、さて此多那具毛ト、唐土天竺西洋の天
學者のいまとくべ、いまとくねトちるが、天地の事ト說トあらじが、
ちぬトちれど、今この多那具毛ト、ふとのナムとくとくして、

皇國天文テハシノ 嘴矢シソ よせんともとむすり、まづ久毛クモ とよとのまくらどり
久毛クモ とよとよすりあふ、このひとうち眼メラメラ よゑゆる
雲クモ そつ、いまいとうち眼メラメラ よからぬ積氣カクイ とつ、本書シキ よ雲クモ の字シマツ をか
きて、らきとハ 重多那久毛クモ 、目メ よからぬ積氣カクイ といつて、
久毛クモ 精粗セイス のコトウ ちのコトウ て、りすシテ 同物ドウモク すれば、同名ドウメイ すれば、久毛クモ
を酌タマシ とりふタマシ そばよういで、地下チカ の水ミズ と天上テイショウ へひそひそ
そめすれべりふ、阿米アメ 、浴ヨム とよすりふタマシ そばよういで、水氣ミヅキ の天上テイショウ へひそひそ
て、又アリ ぐる
くもと

浴

雨

星

星

天



酌あげざれべ浴べきよしや、酌とりよまばより、雲といふとばひど
き浴とりよまばより雨とりよとどぶひどきくらみのちるも此圖
小よりてはともぐくわう、この理ともして、精微の水氣にらのぢくと
も久毛といひ、地球とつむものと阿米天とりよもわうとさくらぐ
さくらぐとて其雲雨クモアメ、時ハタケりてもくるまのぢくと、精微の水氣ハタケ
つむからんのぢくわう、人の身ようもならんのぢく、木草の葉ようも
ならんのぢく、土ようも水ようも、もぐてならんがくざるとろほぢく
きのぢく、此立のぢく精微の水氣とも久毛といひ了證ハ祈年祭祀
詞トヨクモノ、青雲能靄極タヒクキハミシラクモ、白雲能墜居向伏極オリヰカバズキハ、
雲となし、いづ、久毛アリモ、精粗のよひりゆくとももせず、古文

小てしてとめど、白雲、雨と酌上る。けり。雲ちう、されば水氣の粗
ちう、もろいと、白くもゆるきのをれば志良久毛といてすむ。もぞ
けひよふにゆくならぬべ、精微の水氣、人の眼よからぬよ。
その色をなほ似されど、積もば青れどもとらへそん、大空乃
青くともゆる、此水氣の色よぞんりゆ、あき小より安袁具毛とも
さきやく、れのとまく、國友某の氣炮うつとくくらうよ。筒口俗ヨニヅア
サギとよぐくうをうすらけ氣五六寸、ええと、のうに、ええぞざくま。
これもほどく、氣をあくろよくもいもくるが、彈くれてぞざくま、水氣のかくの
集すばる人の眼よくもあきる水氣のいろよぞんあくもあくが、
おとく昇る降るの理と、むよすま、日輪の引力ヨリ引られて昇
モ地胎ヒツチカラの引力小引くれど、降る小ぞ引くれ
日輪の引力ハ伊邪那岐命ヒツチカラ、伊邪那美命ヒツチカラ精考
古傳通解ヨツヨク、冬め行ヒツメイをどい、さくわやくまく、とくすく

けがく水氣、夜々かねばくぐるなり、まきを俗よつちとひふ多々、
くぐらむるねまに、夜あくまご又精微の水氣のぼくぐらハみば
みとまく、みほくべくぐる

きのぐ、日毎夜毎よ

タナ

タナ

タナ

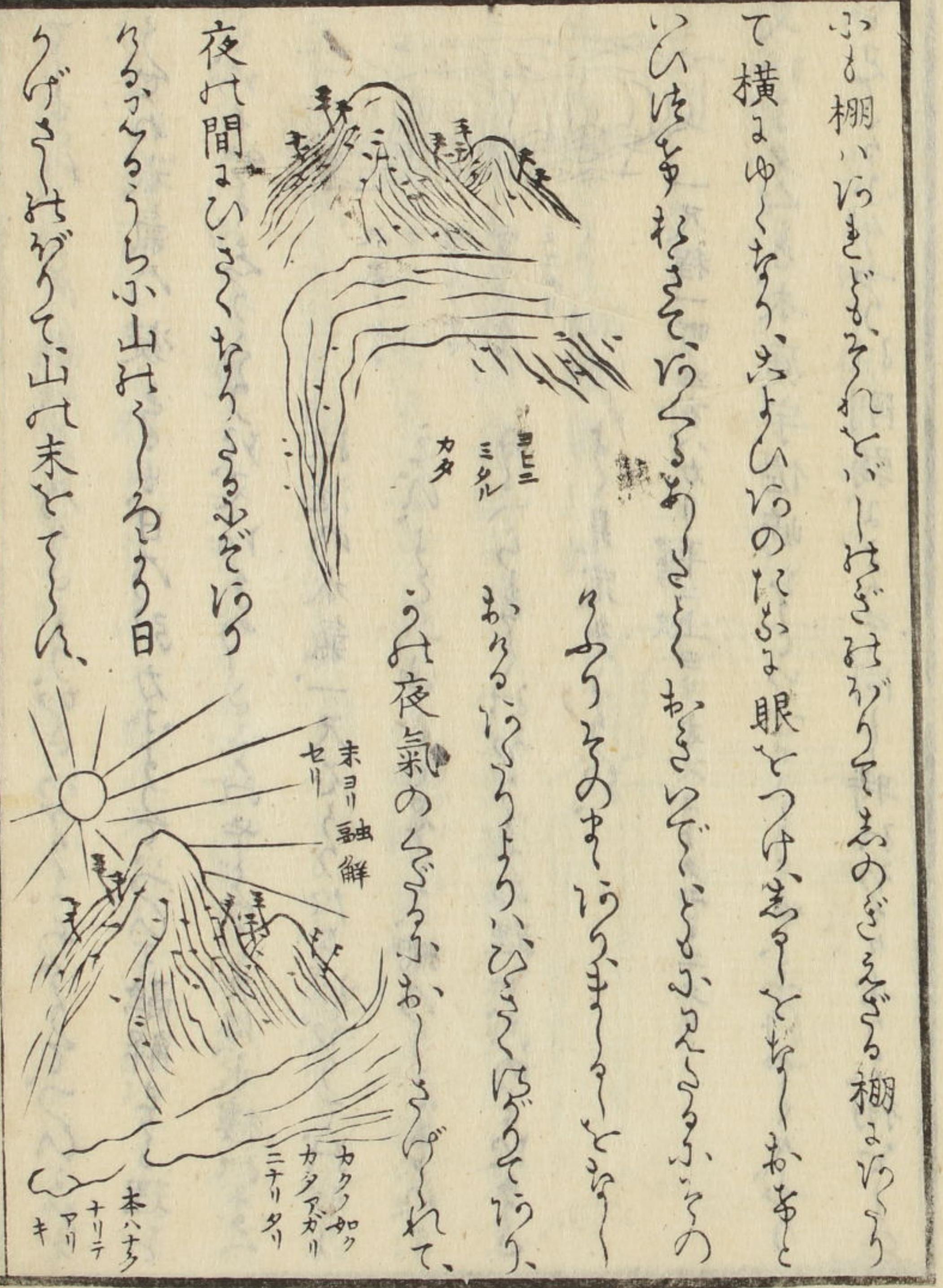
タナ

タナ

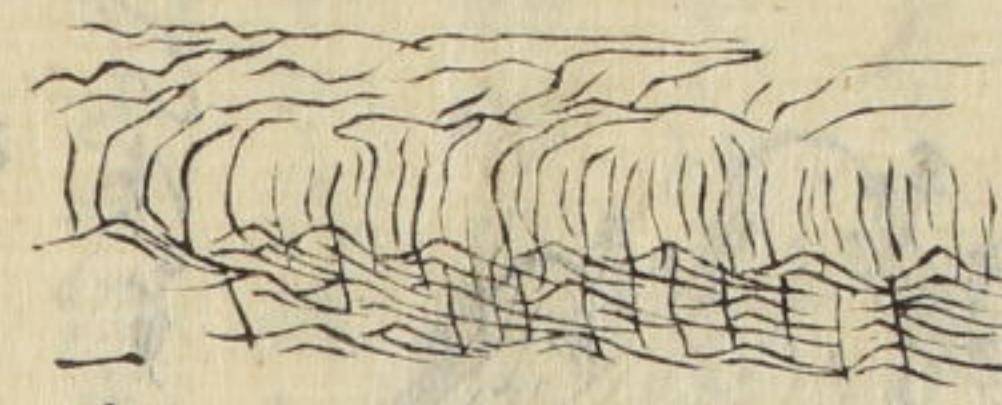
タナ

タナ

かくはぐくづく五百重の多那をかねうる、天保十一年四月もに
姫路の仁壽山よやぐて、物の講釋をどもくううう、の多那
とちれ理と見るをとくううう、奥山村とよとこうう、タぐも
芥とやれうううううううううう、火れ事もやと疑ふや
うううううううううううううううう、半腹ナカラまでけびりて横よゆく、まきと
門人よも小示して、うやうにかじくともまきとつて、まきとより下



てよりされど、その煙は未だくのようが、からだよりあがくて、ついよひえ
うせぬ水氣の凝まると、日ひ引力ふよみて、つひよ融解する理と
も、ならせん。かうして、又、うるおうと、やうともあは、水樓はまへ
る。



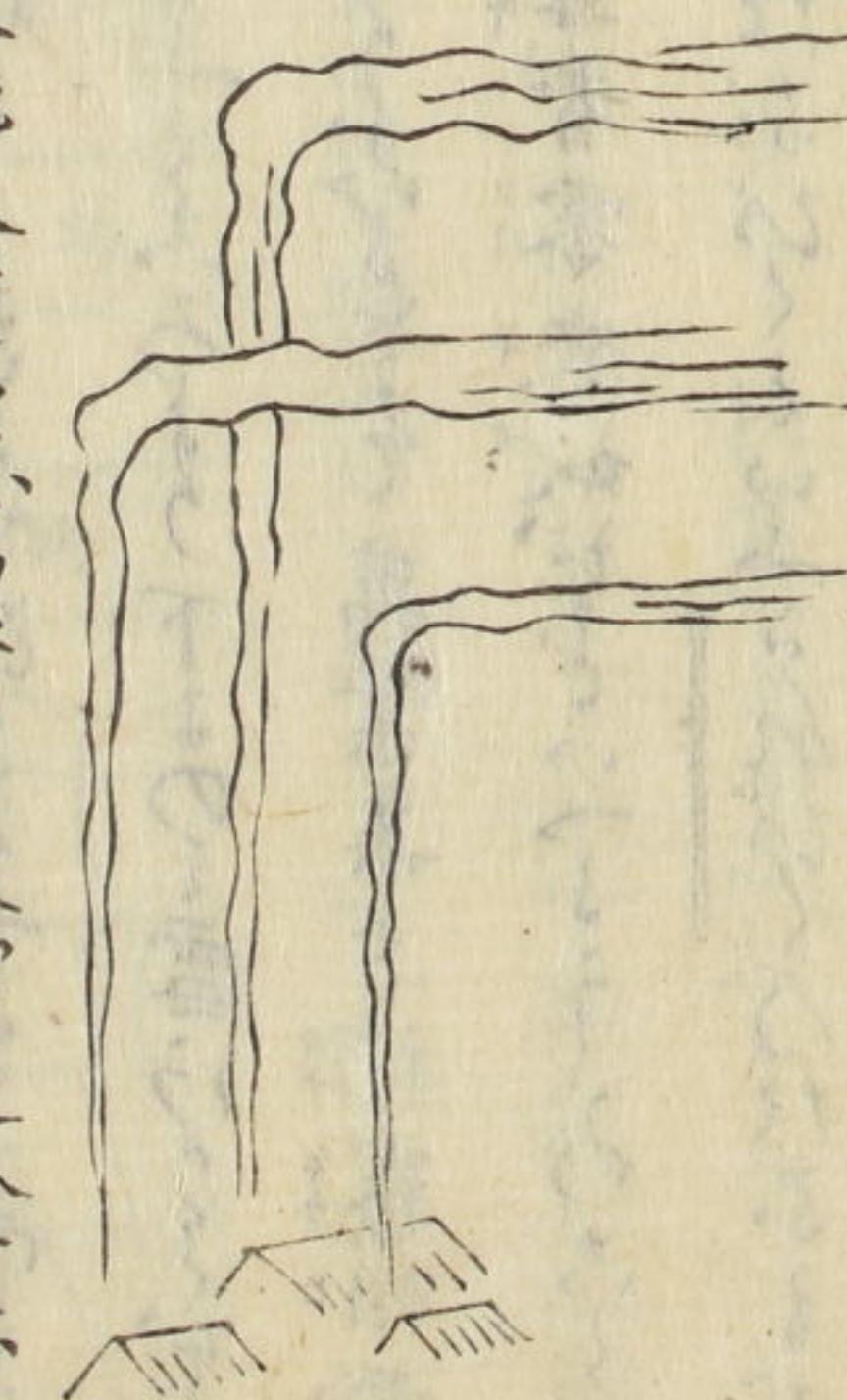
水氣ノナリ
横ニテサマ
雲ニカハス
ミエタリ

計池の水氣、一尺ぞううたらけびりて、ばびり
えび、ともふゆくをやくし、棚りくもそれ
とらまくみがくもぬ理と、おのとくま
よく見定せうれ。

一尺程一町四方バカリ平ニ上ヨリオスゴトクニミエタリ

又うるタぐき、木庭宇佐崎をどりふくまくと、まくやくふ
と、うる小、うは剛弱よりて、同ド時せりうづく、棚セーの

ぐこの高きゆう低きゆう、
そん勢つきはると、あくまで横よ
ゆくちまとてまく空中よ五百
重とふぞう、棚積氣ねほ



きよとくもうれ、神壽詞よ天能八重雲、萬葉よ天雲之八重、ま
く天雲之五百重などいふ、まくこの棚積氣ねほと、棚のかほ
うと八重、また五百重と、つむかう、ゆまくもとりすま雨雲と天積氣
のまくあう、八重また五百重などつぶ、雨雲よ、ゆうで、天積氣
をうと辨へても、明らかにまべし、或人云、高き山よ、はざまく、わ
くうなるまくうづく、ひやうむる所よ、で、又、うくうむるどもろを

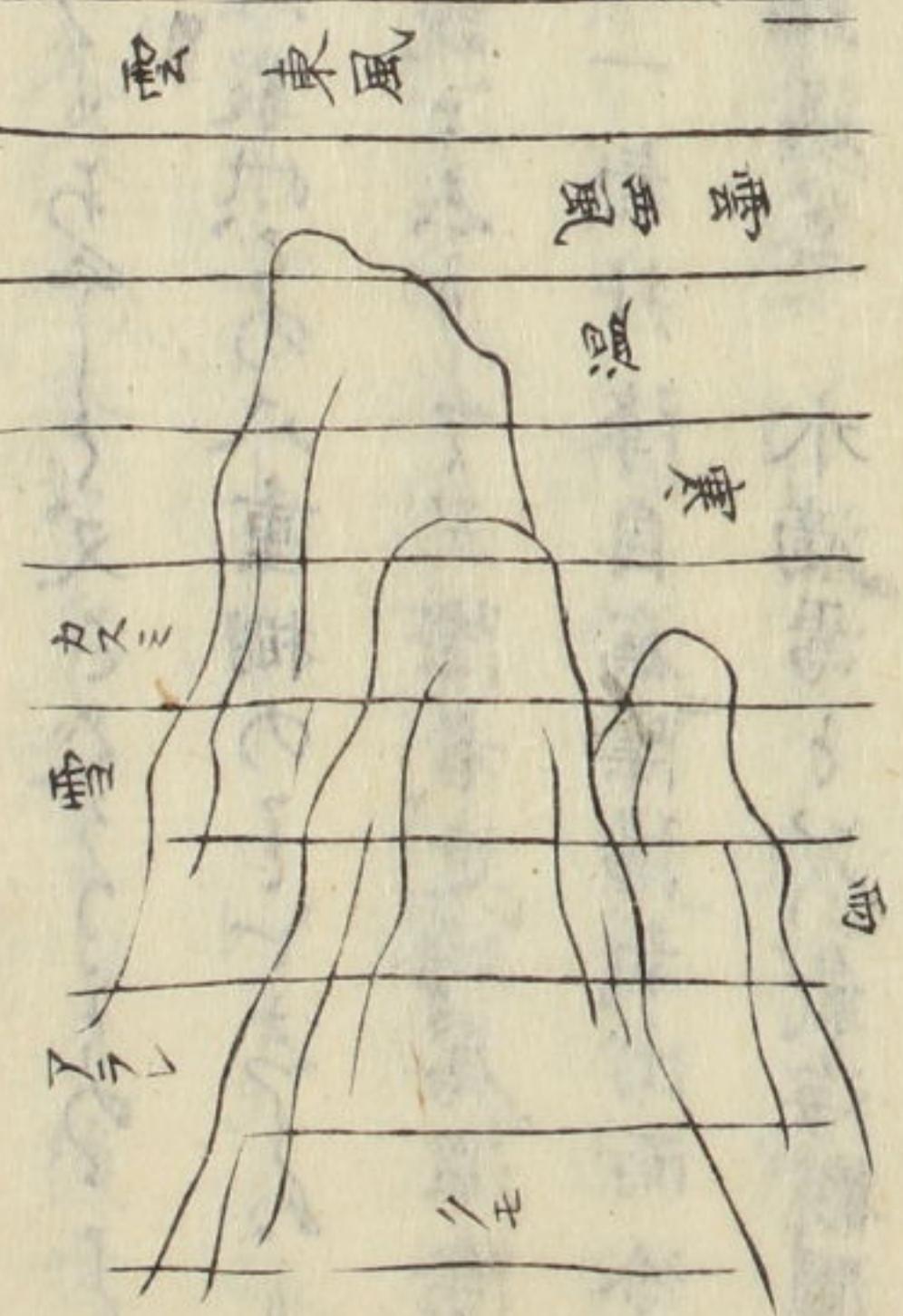
ゆくとらうといつ、まきよあひ重棚よりとむ、又轍外と
す江戸へ繪師のまぐら、安房國鹿野山カウザンに
ふりこぼれ、さがり來るゝの、まよ下よ、雪れづく侍
まふ、ちを雪のまゐるやうけある、あやめ、つりまわ
く日山よりくづくふげよ山のまよ雪つりてうづく
をゆく四方の山をうふ、まもとひきそくまとく、
づの山をのらうとありふとまろとく下よの雪うづく
まよ上よ雪、まえざくれとくつあまくと萬葉集七
モ フラスカ 毛零奴可モリ十三棚雲利雪者零モリ來奴モリ、などいてうづみたば
うづくは、かきのにあじくとく、れづく乃たふも、

まくらのまゝ、下より大そめ雲とまづ、おもむりて
ゆきゆき、西へゆきゆき東へゆきあら、たまよよりて異ぢゆゑ
ぢう、風へくるるいわくらゐのまゝと横よわらひそそぐ、高くかく烈

春秋僖公十六年六鶡退飛

風のふうへ又屋棟とうらこ

木草よらぬとあり、田畠をうへ風の屋棟よひらぬ時も



棚タタラもととあくとまもづきく、ちのくみの、^{タタラ}天文窮理もどりよ
とわゆるをみて、たゞ天之八重多那具毛といつ、微言よがばう
れ天地は大理をもじてはうりよりやく、又さざうらまくと
わくと精り、西洋の窮理家は、この八重棚のとどちぬし
あやしく、物理小識は西說とよすて三際者、近地爲温際、
近日爲熱際、空中爲冷際云々一氣升降自爲陰陽氣出而冷
際遏之和則成雨如飯蒸之餾遇蓋而水滴焉とい氣海觀瀾
等小も、何ととひて、あまとと鹿く、我古傳の微言小たりれ
神理の精り、微やうむよかよびんちうる、古傳通解

阿豆那比考

東平

古道乃、闕典よりひきくや、もとふうに野中古道だ。

神功皇后御紀云、更遷小竹宮。小竹此ノ云之若適是時也、晝暗如夜已。經多日時人曰常夜行之也。皇后問紀直祖豐耳曰、是怪何由矣。時有一老父曰傳聞如是怪謂阿豆那比之罪也。問何謂也。對曰二社祝者共合葬歟。因以令推問巷里有一人曰小竹祝與天野祝共爲善友。小竹祝逢病而死之。天野祝血泣曰吾也生爲交友何死之無同穴乎。則伏屍側而自死。仍合葬焉。蓋是之乎。乃開墓視之實也。故更改棺櫬各異處以埋之。則日暉炳熾。日夜有別どらるぬとちり。

アツア豆那比といふと通證する中人、天智紀天武紀失火訓阿豆那加禮。據此則阿豆那比蓋穢火之義歟。といひ天智天皇御紀卷三十二小も阿豆那賀禮又見天武紀蓋熱流也。素問炎暑流火保夜介倭姬命世記川入火燒天皇紀卷三十四十九丁目失火と云ひてアツナガレと訓をつゝ訓見天智紀とあくまでも印本の訓点を曰く火流と云ひアハミ。古假字へ熱流ハ誤なり。又の通證は説ハ阿豆と熱毛ととあるものゝうて、那比やいふとも説ど、又その熱毛ハいつれゆゑをも論められばいづひなきあらむと、蓋穢火之義歟といふやゑをバ、阿豆那比と云語にて、穢火の義コロアリ。アリと云ひ意をぐべー熱之火とりよ義もとつむとかりす。がむとくやうてからし。もと集解卷九熱之火の言ハ次下集解のとれ許と評ひ。條より。

いよ試ト通證の穢火の説と助シテ能ハシメテも此彼例多シテれ、今煩シキ引シテ出スてもシテ、熱ヒとハもシ火氣の炎熱アツキとリすム也モ懊惱閑熱アツナウモンネツの文字と、阿都加不アツカフといふ言ハシメテは當ハシメテもシテ、
而ハシメテうしりやモ、閑モダツくシテむきよシテりシテすム、穢火
ヒ熱之火とハシメテよシテざシテやシテすム、されどシテほシテさシテわシテの
きシテぐ心ハシメテ安堵オチキ、うシテてシテすムよシテうシテてシテ、例の語格と正シテして委シテ論イフ
べシテまシテ此言ハシメテ、宇良奈比ウラナヒオコ於許奈比オコヒ、都美奈比ミナヒ、麻加奈比マカヒ、
波行四段ハシメテ活ハシメテ、奈比ナヒ、活ハシメテ、此阿豆奈不アツナフを
吉ヨシはシテいシテふシテへシテとシテ、阿豆志久アツシク志支シキ志祁禮シケイとシテ活ハシメテ、源氏物語桐壺、阿豆志久アツシクとシテ心得ハシメテらシテすム、此言ハシメテの所作進退アツシキ、
豆志久アツシクとシテあるシテ心得ハシメテらシテすム、此言ハシメテの所作進退アツシキ

穢火之義も、二十陽合藏其罪見象ももももどりてゆきと
徒事すりぐれど、考ふ此事實やいづれうともと
事小竹祝と天野祝とが交友ハ後世のいもゆる念契ヨ
テ男色の最初ハジメゆくふとく房の色情いもじくよじと上まくる代
よりは穢行ゆくと、皇國の上古アマミヤクそひまゆうの國津神のくわびら、忌ひ
をたすくとくづく高天原の正風の大礼タケルヒの因准イシナシ一たすくとくづく
くぞ、男色をどひの名目タマフもあくつむ、大祓の淫穢の罪條ハシマラミとくぬ
すよづらムカシとくづくと中古以來、外域の穢行ハシマラミとて貴人の御上ミサ
きく、公然アマミとくづく此二人の祝の事、何といふく男色と、乞
ゆゆるタマフあきよれられ、此二人の祝の事、何といふく男色と、乞
うごとにいもんよひのむる善友シキトモ、一人ミキワラが逢病ハシマラミして世を
さうなまざと、自オが奉仕ワカツマツする神事ワザをよ捨て自殺ハシマラミともして、
うをすりづるまづれいもんされど也、ちひつとごとの死別ハシマラミとくづ
むらすく、同穴の言ハシマラミ

て、屍^スより^ム自殺^{シキ}も^ス全^ム、男色^モ神理^モに^ジ穢行^ス
今世の男女^モ情死^{シキ}同^ド也^シ、男色^モ神理^モに^ジ穢行^ス
モ^ス、^{シテ}い^フ罪^スするハ^シま^ス、^{シテ}合葬^スとい^フと^シも^ス
も^スも^ハ正氣^モ雍遏^{シテ}、室氣^モ充満^{シテ}、神氣^モ充満^{シテ}日^ヒ暉^カ
塞^カを^シべ^ト、不正^モの空室氣^モ充満^{シテ}、神氣^モ正^シと^シ雍遏^{シテ}
す^シく^ハ書^シも^ス暗^シも^スあ^シも^スう^シる^ハ、^シく^る疑^シも^スぎ
人^モも^スい^ハぐ^ト、^シれど^シ、^シの^モ男色^モの^シう^シ行^シく^セと^シも^ス、常夜^{トヨヨ}
事^{トシ}も^スあ^リぐ^ト、^シれど^シ、^シの^モ幽冥^モ事^{トシ}も^ス、上古^モの^シ神氣^モさ^シう^シち^シう^シ、^シは^シ顯露^ハ
神^モ離^{ハシ}よ^ハく^ル、居^シて^シ不淨^モと^シづ^クや^ハ、身^モぐ^ハよ^ハく^ル、親^モく^シの^シ職業^モ心^モせ^シび^ハら^ハは^シ
き^シ情欲^モ身^モ殺^シて^シあ^リま^ス、合葬^モさ^シり^シ罪^モお^ほろ^シむ^シあ^リぬ^シと^シ、^シ○因^モ云天孫降臨幽顯分界の後も、此皇后の御代も^シう^シすで^シ、推古天皇の御代以後も^シく^トて考^フミ^バ、^シの^シ神代も^シう^シすで^シ、精考^シり^シて、歷朝讓位考^ハ崇神天皇應神天皇欽明天皇聖武天皇^モの論又^シづ^シ

ひきうち小まみあいじいぢなまうび印刻もる、歌辭
緊要考の大旨小もううぐそじてあり、さて鈴屋翁の大祓後
釋よ、都美いほくえゆて、罪科よあづば、身よ觸犯せる汚穢乃
つすれく除こうぬと云、と説ゆるべく、阿豆那比之罪の汚
穢少く、小竹神神名ハ所見あし天野神神名式によるに紀の國ハ天野村丹生都比女神社丹生都比女神社ありとぞきう
憎ニテ忌キテひ強ヒサシい、天地乃正氣と神社内ミヤニヤヌキ小ぞとぞめ入アマきさせた
すいつハナリむさしてううけハナリ祝等ハナリ、あひくらハナリあるもへる禍鬼ハガモノ乃
息吹、窒氣ハナリとすりて、天日トコヨ遮サヘヤすより一ハナリ、合葬モモのあ
てもあひくら常夜行ハナリありなし、いや、世人の穢行ハナリとも、ば
ううハナリとづめ行ハナリをぬ小よハナリて、かく辨ハナリふとこそても、空吹風ハナリ
のハナリおほよれハナリすも、もうくされど、うもううこ神理ハナリとえだ

ぬま、正き神よ忌まれまわくもるやうぞう

嚙々筆語

嚙々筆語

二篇三篇追々出板

佐純乃屋藏板

天保十三壬寅六月新彫

京都書肆寺町通六角下町

諸先生著國學書籍製本所

近江屋 佐太郎

大坂

河内屋

儀

助

諸國

書肆

紀州若山

坂本

屋

記一郎

播磨姫路

灰

屋

助治

江戸

和泉屋

吉兵衛

